

横浜市芸術文化教育プラットフォーム・トークシリーズ アート×教育 共有しあう役割を考える

## 『美術館と子どもたちをつなぐ』

文化施設と子どもたちや若者をつなぐ取組について、ふたつの美術館の事例から考えを深めていきます。特に芸術文化の関わりが必要と感じられているながらも触れる機会が少ないとされている中高生や若者を対象とした取組から、文化施設等の社会教育的役割について再考し、そこで行われる教育活動がどのように社会とつながっていくのか、その可能性について探っていきます。

### ◆ゲストプロフィール

#### 端山 聡子 (はやま・さとこ)

横浜美術館主任エデュケーター／主任学芸員。1989 年より平塚市美術館準備室に勤務。開館後は資料整理、保存修復などを担当し、絵画材料、色、その他のテーマによる教育プログラムの実践を通して利用者の学びの多様性を探求した。携わった教育普及活動を基に市民が参画する自主企画展を 3 回実施。2013 年 9 月より横浜美術館で、市民協働 (ボランティア) および鑑賞教育を担う教育プロジェクトチームリーダー。長期にわたる中高生プログラムなどを担当。

#### 塚田 美紀 (つかだ・みき)

東京大学大学院教育学研究科博士課程を単位取得退学後、2000 年より世田谷美術館に勤務。地域の学校との連携プログラムをはじめ、10 代以上の参加者による美術と身体表現のワークショップ、美術館の建築空間を活かしたパフォーマンスシリーズなどユニークな企画を手がける。「冒険王 横尾忠則展」(2008 年)、「エドワード・スタイケン写真展」(2013 年) など近年は展覧会も担当。5 年がかりで準備した「アルバレス・ブラボ写真展ーメキシコ、静かなる光と時」(2016 年)にて第 12 回西洋美術振興財団賞受賞。

### ◆参考文献 (順不同)

- ・ 降旗千賀子(2008)『ワークショップー日本の美術館における教育普及活動』、Fuji Xerox Art Bulletin
- ・ 東京パブリッシングハウス、目黒区美術館編(2009)『フォーラム・連続公開インタビュー 美術館ワークショップの再確認と再考察ー草創期を振り返る』、Fuji Xerox Art Bulletin
- ・ ミュゼ VOL.118(2017)、P10-15「特集：アートを通して世界を読み解き、歩み出す 美術館の教育プログラムの実践から見えてきたこと (塚田美紀インタビュー)」
- ・ 世田谷美術館 ワークショップ「誰もいない美術館で」の記録 1～7
- ・ 高橋直裕編(2011)『美術館のワークショップ 世田谷美術館 25 年間の軌跡』、武蔵野美術大学出版局
- ・ 内田伸一編(2018)『森美術館主催国際シンポジウム記録集 現代美術館は、新しい「学び」の場となり得るか？ーエデュケーションからラーニングへ』、森美術館
- ・ 中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛編著(2016)『触発するミュージアム 文化的公共空間の新たな可能性を求めて』、あいり出版
- ・ 佐藤学・今井康雄編(2003)『子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践』、東京大学出版会
- ・ 齋正弘(2011)『大きな羊のみつけかた 「使える」美術の話』、仙台文庫
- ・ 美術館教育普及国際シンポジウム実行委員会(1993)『美術館教育普及国際シンポジウム 1992 美術館連絡協議会創立 10 周年記念誌』
- ・ 美術館教育普及国際シンポジウム実行委員会(1993)『美術館教育普及国際シンポジウム 1992 報告書』